

特集号に寄せて

伴 五十嗣郎

中世伊勢神道書の『豊受皇太神御鎮座本紀』には、外宮豊受大神鎮座のことが、次のやうに記されてゐる。

戊午（雄略天皇二十二年）秋九月望、從離宮遷幸山田原之新殿、奉鎮御船代・御樋代之内。樋代則天小宮之日座儀也。故謂天御蔭日御蔭隱坐祝言祿也。（中略）以天衣奉飭之、如日小宮儀也。

豊受大神を奉鎮した御樋代は、天の小宮の日座を表はしたものであり、神衣をもつてそれを飭り奉るのは、日小宮の儀に準へたものであるといふのである。伊勢神道書の同様の記述を勘案すると、天小宮と日小宮は同じものを指してゐることが知られるのであるが、それは神代紀瑞珠盟約の章に、

是後、伊弉諾尊神功既畢、靈運当遷。是以、構幽宮於淡路之洲、寂然長隱者矣。亦曰、伊弉諾尊功既至矣。徳亦大矣。於是登天報命。仍留宅日之少宮矣。少宮此云倭柯美野。

と見える「日之少宮」のことであるのは言ふまでもなく、中世伊勢神道書では神霊の鎮まりますところ、また神霊勧請の意義の拠所として重要視され、頻繁に登場する。所謂神道五部書以外でも、例へば度会行忠の『神名祕書』に、天照大神御誕生のことを述べて「日神天照大神即留宅於日之小宮焉。」と記し、天照大神の御託宣に基づく外宮先祭の由来を述

べた箇所にも、「即承皇天之嚴命」天移日小宮之宝基、造伊勢両宮焉。」などと記してゐる。

神代紀が、神功を畢へられた伊弉諾尊が寂然として御霊を留められたところと伝へる日之少宮の問題は、かうして中世伊勢神道に於いて重視されたが、それはまた、吉田神道・吉川神道、さらには垂加神道へと継承されて近世に至り、神学的に格段の深化が図られることとなつた。ことに山崎闇斎は、吉川神道に於いて生死落着の理を示唆するものとして重視する日之少宮の問題が、前述の通り伊勢流の神道説の中で、早くから展開されてゐたことを知り、その神道的死生観形成の上で、多大な影響を与へられてゐる。

闇斎の『中臣祓風水草』中巻では、大祓詞の「天乃御蔭日乃御蔭登隱坐志氏」の部分に注して、先づ前に引用した『鎮座本紀』雄略天皇二十二年九月望の一条が紹介されてゐる。そこには、豊受大神の御霊を御船代・御樋代の内に鎮め奉つたこと、その御樋代とは天小宮の日座、つまりは日之少宮に準へたものと説かれてゐること前引の通りであるが、闇斎は、右の引用に続けて、次のやうに自説を展開してゐる。

嘉謂、樋、日也。心也。船則心腑之貌。日座云比久羅。火藏也。心臟也。神祠云保古良、此之謂也。日少宮者、神道始終之本体也。故神道之葬礼、如遷宮之儀也。此祕伝也。

『御鎮座本紀』の記述を元に、御樋代・御船代が日之少宮に準へたものであることを補強する解釈をすすめて、日之少宮は伊勢神道の説くやうに神々の留宅するところ、留まり住みたまふところであると共に、人間の靈魂の落着するところ、従つてそれは「神道始終之本体」であると説き、神道の葬礼は遷宮の儀のごとくであると論じてゐる。

かうした日之少宮の解釈は、吉川神道から垂加神道へと継承され、一段と深められたものであつて、玉木葦斎の『玉籤集』に記録された「日之少宮之伝」を見ると、左のやうに同様の論が展開されてゐる。

日之少宮之伝

日之少宮者、造化にては丑寅之方を云。日の出方也。是一昼夜之始終也。少宮とは始之義也。神靈留る所也。少宮とは若きは物の始也。始に帰る義也。生死始終一也。心は火藏也。日也。神明之舎也。乃日少宮也。神祠を保古良

と云。火藏也。故に日少宮は、神道始終之本体也。依て神道之葬礼は、遷宮の義に同じ。此秘伝也。臣下万民は日少宮之名目は憚るべきこと也。

神代紀の伝へる伊弉諾尊の御事績に基づく、この「日之少宮之伝」が、闇斎が自己の生祠垂加靈社を勧請する上での重大な根拠の一つとなったことは、谷省吾氏がその著『神道原論』の中で詳しく明らかにされてゐる。中世伊勢神道書の所説が、闇斎の思考の深化に重要な役割を果してゐるのである。

近世神道家の神靈観や靈魂観、それらと深い関りをもつ生祠勧請などの神学的考究と実践的な展開は、以上のやうに中世の神道説と看過できない密接な関係をも有してゐる。そして「明治聖徳記念学会」は、その創立の趣旨から言つても、かうした問題の研究について、中心的役割りを果す使命があると言はねばならない。優れた研究成果が陸続し、当学会が益々隆昌することを、心から御祈り申し上げる次第である。

(皇學館大学学長)